

JOEFA 2014-2



<目次>

特集 オーガニック・フェスタ 2014

勝ち残る米づくり

<講演> 勝ち残る米づくり・・・・・・・・・・ NPO法人 生物多様性農業支援センター 原 耕造 3p

<事例報告>

抑草技術を極める・・・・・・・・・・ 徳島県・小松島市生物多様性農業推進協議会 森 博之 12p

有機水稻の多収穫・・・・・・・・・・ 茨城県・農事生産組合 野菜村 日向昭典 15p

食味値高得点の秘訣・・・・・・・・・・ 徳島県・東とくしま農協 西田 聖 21p

コウノトリがやってきた・・・・・・・・・・ 徳島県・日本野鳥の会 徳島県支部長 三宅 武 26p

<総括・パネルディスカッション>・・・・・・・・・・ 29p

インタビュー・小祝政明 代表理事に聞く

日本有機農業普及協会がめざすこと (その2)・・・・・・・・・・ 38p

特集

オーガニック・フェスタ 2014 (一日目)

勝ち残る米づくり

二〇一四年三月一日、二日に、徳島県小松島市にある小松島市保健センター ミリカホールにて、「食と農を科学する そのおいしさにはワケがある」というテーマで『オーガニック・フェスタ2014』（主催…一社・日本有機農業普及協会、オーガニック・フェスタ実行委員会）が開催されました。二日にわたるフェスタの様様を、『JOFA』では今号で一日目の「勝ち残る米づくり」を、次号では二日目の「食と農を科学する」を紹介します。

参加された方は、いまいちどフェスタの内容を思い出しながら、参加できなかった方は記事を参考に、今後の活動に活かしていただければ幸いです。

オーガニック・フェスタ2014は三月一日午後から開催されました。最初にオーガニック・フェスタ実行委員長の佐伯昌昭氏（株）阿波有機の開会宣言があり、その後、小松島市長・濱田保徳氏、内閣府副大臣・後藤田正純氏、徳島県中央会会長・荒井義之氏からお祝いの挨拶がありました。

その後、「勝ち残る米づくり」というテーマで講演、事例報告、パネルディスカッションが行なわれました。以下は講演・報告などをまとめたものです。なお、読みやすいよう見出しを挿入し、適宜内容を補っています。



〈講演〉

勝ち残る米づくり

NPO法人 生物多様性農業支援センター 原 耕造



原耕造氏のプロフィール：全農在職時は産直事業を中心に様々な事業を企画して実践。カット野菜等の業務用野菜の開発、ヨーロッパでの日本種野菜の契約栽培と配送システムの開発、トレーサビリティの原型になった全農安心システムの企画、遺伝子組換えをしていない飼料の輸入システムの開発等。産直産地をトレースする手法として生きもの調査を企画。全農在職中にNPO法人生物多様性農業支援センターを設立。全農退職後も引き続き支援センターで活動を継続中。平成4年以降、日野市で自治会を中心とした地域活動を展開し、地域交流の促進、周辺農地の保全、中長期の地域防災等を実施中。

最初はNPO法人 生物多様性農業支援センターの原耕造氏による「勝ち残る米づくり」というテーマによる講演が行なわれました。以下はその要旨です。

小松島市生物多様性農業推進協議会の顧問の立場でお話したい。これから話す話は、過去の仕事もひっくり返した上で、どういう情勢分析をしなから、どんな仮説をつくって、どういふふうに行ってきたのか、ということをお話します。

● トレーサビリティシステム

例えば、皆さんもすでにやっている

お米のトレーサビリティシステム。この話は正式に全農の理事会を通してやったんですが、最初の二年間は誰も相手にしてくれず、水とお茶だけでした。

最初の内は講演などで農家の方に記帳する大切さなどを話していました。返ってくる言葉は一つだけ。

「原さん、それでお米がなんぼ高く売れんのよ」

私はそのとき「高く売れませんが、でも問題が見つかったときに、農家自身が無実の証明をする手法が何もないんじゃないか」と話した。

きっかけは、例の所沢のダイオキシンが問題になったときにやらなければいけないと思った。記帳しながらやろうと思ったわけ。これは差別化商品で

も何でもない、そういうことをずっと話していったんです。

一挙に広がったのは無登録農薬の問題のときです。実はあの当時、北海道の農家が韓国などから登録されていない肥料や農薬などの生産資材を購入していた。そのことについてホクレンさんから、何とかならないか、という話があったんですね。

● 遺伝子組換え

それと遺伝子組換え。当時、厚生省と農水省がずっと張り合っていた。アメリカが安全と言っているものを何するんだと。ある展示会で遺伝子組換えをしていないダイズとトウモロコシの展示をしました。ところがうち(主農)のエサ部長が来て、それを撤去しました。あるとき遺伝子組換えの作物はまだ三％行っていないときです。

遺伝子組換えをしていない飼料の輸入システムは、アメリカからの輸送ルートの中で他の飼料メーカーより優位に立てるということをやった。もちろん生協さんの産直、産地の方が非常に協力してくれたという背景はありました。

● 世界の貿易自由化の流れを止めることはできない

先を見通す中で、皆さんの立場でどうしたらいいのかなあ、という話があります。

状況分析を間違えた事例として、一九九三年の細川さんが総理大臣だったときのガットウルグアイラウンドがあります。ウルグアイラウンドの前までは、農産物は自由貿易の対象ではなかった。しかし、ウルグアイラウンドのときに初めて自由貿易の対象になった。

そしていま、TPPの問題がありません。これは挫折するかもしれませんが、挫折したからと言って、農産物の関税自由化の交渉が終わりになることはありません。WTOのドーハラウンドは復活してくるし、いま現在、日本とオーストラリアのFTAの交渉もしている。

世界の貿易自由化の流れの中で、日本だけが抵抗していても流れを止めることはムリです。だからといってTPPに賛成だと言っているのではない。情勢がどう変わろうが、変わったときに慌てるのではなく、変わってもきち

んと勝てるような態勢をつくっておく必要があるということです。

● 商品の競争力

私は当時、日本の農産物をヨーロッパに売るために、西ドイツに行っていた。ヨーロッパに住んでいて米がないものだから、「錦」というカリフォルニア米を輸入しました。そしてモチ米を少し混ぜて食べた。

このときカリフォルニア米を大西洋を渡ってドイツに入れると、一〇kgの風袋で三六〇〇円でした。その当時、日本の米は出せなかったし、もし売れたとしても値段は一万ナンボになります。

そのときにカリフォルニア米を日本へ持っていったらどうなるかシミュレーションしてみました。すると一〇kg当たり四〇〇〇円くらいになりました。

このように、カリフォルニアから太平洋を渡ってくる船賃だとか、ベトナムから東シナ海を通ってくる船賃だとか、そういうことをひっくるめて商品の競争力がどうなるか、こういうことを見極めた上で、外国の米が入ってき

たときにどういふ情勢になるのか、きちんと見極めなければいけません。

当時、日本の標準価格米というのがありました。その標準価格米より総合評価は多少低いか。そのまま小売店舗に並べても販売は可能で、価格が三〇〇〇円程度に設定されている場合には業務用としてかなりの量が流通する可能性がある、という分析をしていました。

●数量と価格のコントロール

一九九三年の米価はずーっと下がって、稲作農家は大損したわけです。通常ならカンカンに怒っていかないといけない。一反当たり一万五〇〇〇円の問題ではない。もつと五万とか六万とかもらわなければいけないようなことになるのでしょうか。

なぜこのようになったのかを理解した上で、今後も政府の対策の中で自分たちのイナ作が持続できるのかできないのか、というように考えた方がいいと思う。私は、ウルグアイラウンドが悪かったとか、そんなこと言っているのではない。

その後、九五年に食糧法に転換しま

した。国が数量と価格をコントロールしていた時代にガットの交渉があった。数量と価格のコントロールを基本的にはしないというのが一九九五年の食糧法。実質的にはしているけれど、フリーハンドにしたなかで、実は九三年の交渉の自身を変えななきゃいけなかったということなんです。

●構造改革と意識の転換

もちろん農水のお役人の方々は全部分かっている。分かっている、二〇〇〇年以降の中山間地対策から始まって、いろいろな構造改革をしようとして取り組んで来ている。いまも新しい農業政策をやるうとしていける。しかし、なぜ構造改革ができないのか、きちんと理解しなければいけない。

いま日本人が何を考えているのか。アベノミクスではないが、まだ経済成長神話と云うことをみんな思っている。昔はニーズをどう解消していくのか、次にウォンツ(wants)になってきた。いまはホープとか、シェアの時代じゃないかと思うが、残念ながらそういうような意識にはなっていない。

意識が転換されない中で構造改革をしようと思ってもできない、というのがこの二〇年間の総括です。

お米の価格構成を国民は残念ながら理解していない。国土をどう管理しているのかということに対して、国民が理解していない。じゃあTPPどうするんだと。聖域品目の設定で(交渉に)参加することになって、五項目は死守するんだと言っている。それでも折り合いがつかなくて、交渉は連休明けになった。猶予条件をどう取るのか、一〇年なのか一五年なのか。たぶんそういう交渉をしていると思います。

●関税自由化でお米はどうなるか

では、関税自由化でどういうことになるのかシミュレーションしてみた。関税撤廃の猶予期間を一五年と見たときに、どうなるか。関税を毎年五〇%ずつ削減すると平成四十年にゼロになります。

では国内需要はどう変化するのか。一般の消費者は「自由化しても国産米を買います」と言う方が八割、二割の方は安い米(輸入米)にいきます。

一番のポイントは、国内の米需要の